

今週のメニュー

■トピックス

◇東京大学本部棟での窓改修による効果について（夏期）

■随想

◇古代ヤマトの遠景（72）－【磐井の復権】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

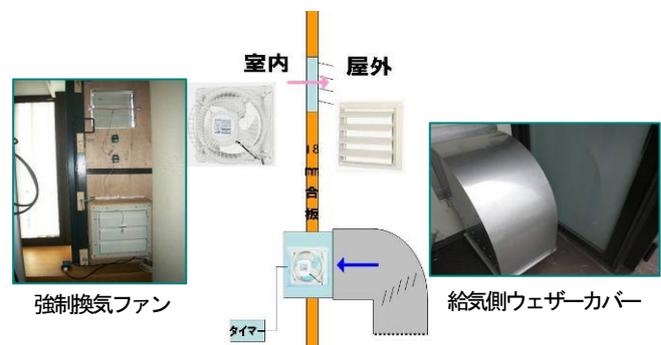
■編集後記

■トピックス

◇東京大学本部棟での窓改修による効果について（夏期）

近年の経済・社会情勢の中で持続可能性といった考え方が重要視されています。これにより、既存建物を解体し新築してだけでなく、リフォームして活用する方向に進んでいます。このようなことから、省エネルギーや室内環境を良好にする改修技術の重要性が高まっています。省エネルギーには建物の外気に接する壁や窓などを断熱改修することが最も効果的です。中でも熱の出入りが大きい窓廻りを改善することが手っ取り早く、かつ効果的です。この実例として当協会が協力して行った東京大学本部棟の内窓設置試験の検証結果をご紹介します。

2009年にTSCP（東京大学サステイナブルキャンパスプロジェクト）で行われた内窓設置試験で、問題点として、夏期に空調の効いていない出勤時に室内に熱がこもり“むっとする”等が指摘されました。今回は、その『内窓の気密性が、逆に不快感を与えてしまう』という矛盾の解消を目指し、内窓を設置した時に、“ナイトパージ”（夜間換気することにより冷たい外気を取り入れ、内部の温度を下げる手法）を併せて運用にすることによって、内窓を有効に機能させる方法も含め、(独)建築研究所 坂本理事長を中心に検証試験を行いました。



ナイトパージ用換気設備

夏期の検証の結果、以下のようなことがわかりました。

- ① 内窓に遮熱LOW-E複層ガラスを使用することによって、日射遮蔽性能が向上し、単板ガラスと比べ窓付近における放射環境が改善され、体感温度が低下する効果が見られる。
- ② 一方で、窓の断熱、遮熱性能が高まることによって、空調をしていない夜間、温度の低い屋外への熱放出が妨げられ、朝方の室温が下がらない。
- ③ 朝方の熱がこもり“むっとする”状況は、内窓設置に加えてナイトパージを実施することによって防ぐことができ、省エネルギーになる。しかし、ナイトパージは熱帯夜など外気温が高い場合、逆に室温が上がることから、外気の状態に応じて行う必要がある。

上記の2009年TSCP内窓設置試験では、断熱性能が向上して冬季の暖房エネルギーが43%削減できるという結果を得ています。この試験が好評を得られたことから、2011年に別のフロアへも内窓が設置され、その効果の検証を行いました。[冬期検証](#)では、窓を通して屋外へ流出する熱量が約1/3となり、窓面の温度が高くなったことから冷感が減り快適性が増すという結果が得られています。

VECでは、こうした検証試験を通じて樹脂窓の良さや、より良い使い方を提案していきます。これから、これらの試験結果や良さをホームページ上でわかりやすく伝えていきたいと考えていますので是非読んでみてください。

今回、協力して頂いたLIXIL、AGC両社にお礼申し上げます。

■ 随想

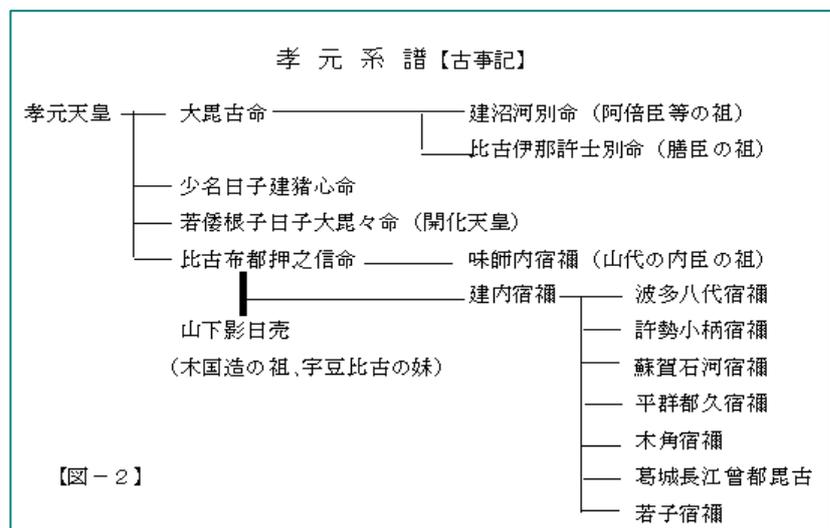
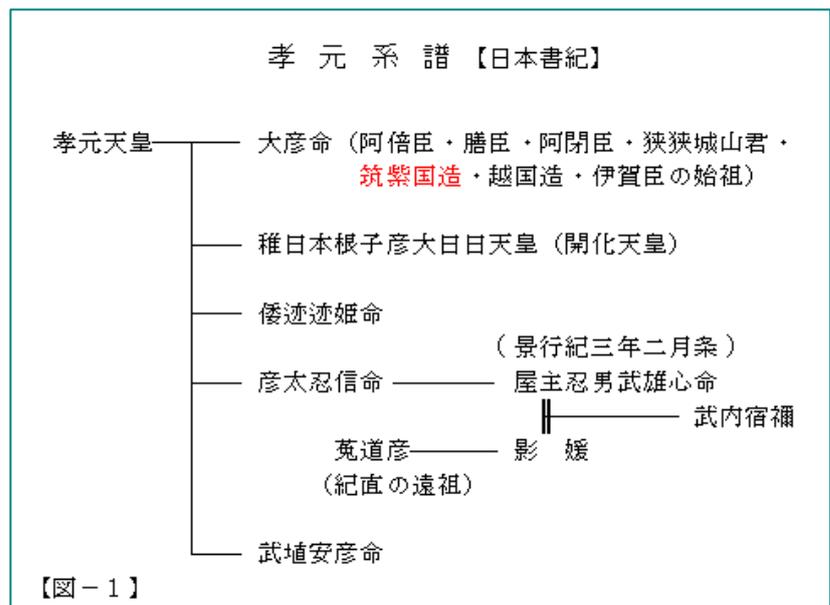
◇古代ヤマトの遠景（72）－【磐井の復権】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

以上までに「磐井の乱」として世に知られているもの本質について、幾分詳しく論じてきた。磐井は継体天皇の九州制圧に協力した具眼の士であったが、時代の変わり目に登場したことから、結局、朝廷への反逆者に仕立て上げられ、政変のうねりの中に埋没してしまった人物だったといえる。ところが、六世紀前葉に磐井を討った事件が、七世紀末から八世紀初頭に最終的に仕上げられた日本書紀において、再評価されたのである。そして、磐井は復権するのである。なぜ、彼が復権したのかは、簡単には説明できないが、以下にその経緯を辿ってみることにする。

その象徴的な出来事は日本書紀における孝元系譜の修正である。書紀の孝元紀には、天皇の子、大彦命を始祖とする氏族として阿倍臣・膳臣・阿閉臣等と共に筑紫国造も併せて記載されているのである（図-1）。これに対し、古事記の孝元記には、建内宿禰を中心とした多くの氏族の系譜が載せられているが、筑紫国造の名はない（図-2）。

書紀においてはこれらの系譜がすべて抹消されており、氏族の系譜に関し、書紀は徹底的に古事記の系譜を消し去り、見直しを図っているの



ある。このような状況の中で、古事記の中には登場していなかった筑紫国造が、突然のように書紀の孝元紀に、大彦命の後裔として記載されているのは奇異である。逆賊との評価からすれば考えられないことになる。

このような変化が何故起きたのか。それは、磐井に対する評価が書紀の完成時期に大きく変わったとしか考えられない。要するに、忠臣磐井が再評価されたのである。では、なぜこのような変化かが起きたのだろうか。

その鍵は百済に対する評価の変化である。継体王家は終始百済を支援し続けている。任那の官家の滅亡は半島内の変化のスピードに、倭王家が追従できなかったからだといえるが、基本的に百済支援の姿勢は変わってはいない。その総仕上げが磐井の乱の約百三十年後に起きた白村江の戦いである。六六三年、唐・新羅連合軍に大敗し、これ以降、倭国は半島から完全に身を引いた。しかし、天智天皇が唐からの襲撃に備えて、各地に山城を築かせ、烽火を整備させ、筑紫では水城で守りを固めさせたりした。

当時の人々は、夫・息子を亡くした家族、満身創痍で帰還した兵達を見るにつけ、なぜこのような事態になったのか、恨みに似た感情を持つようになっていたのではなかろうか。その感情をぶつける標的は、この戦いを引き起こした斉明天皇と天智天皇に向けられたのは当然のこととなる。確かに、この両天皇に関する書紀の記述はおかしなことが多い。

斉明天皇に関しては、要点だけをまとめると、次のような記述が出てくる。

齊明二年是年、天皇は多くの土木工事を行わせた。これについて人々は「^{たぶれこころ}狂心」と諷した。

齊明六年是年、百済救援のために船を造らせたが、曳航の途中、夜中に鱸と舳とが入れ替わっていた。

齊明七年五月、百済救援のため筑紫に遷り、朝倉宮を造った。このとき周りの樹木を伐採したために、神が怒り建物をこわした。また、鬼火が現れ多くのものが病んで死んだ。

齊明七年八月、天皇が七月に崩じたので、喪を行っていたところ、大笠を着た鬼が現れ儀式を覗き見していた。

このような記述の中で齊明六年以降の内容は、この後の白村江での大敗を示唆するものとして扱われている。しかし、二年条の土木工事狂といった気違い扱いの内容と、そのあとの不吉な記事とはやはり同じ範疇にあるものと考えられ、明らかに斉明天皇自身への批判と取れよう。

次に天智天皇であるが、この天皇に関しこのような不吉な記事はないが、この天皇を指す言葉が皇極天皇紀と次の孝徳天皇紀の途中まで、全て「中大兄」と表記されている点が極めて異常である。皇極天皇が乙巳の変で孝徳天皇に位を譲ったとき、中大兄皇子は「^{ひつぎのみこ}皇太子」に立てられながら、それでも孝徳紀の中途までは「中大兄」が使い続けられるのである。本来なら「中大兄皇子」、あるいは「皇太子」と表現されるべきところを、呼び捨てに近い「中大兄」が使用されているのはやはり異常といえよう。このような表記は、中大兄皇子が蘇我蝦夷を討つところから始まるが、これは、書紀の編纂時に、蘇我氏の末裔である持統天皇の意向が反映されたと考えれば説明はつく。しかし、斉明天皇に対する記紀の扱い方と合わせて考えると、白村江事件を惹き起こした張本人に対する、当時の編纂者の懲罰的取り扱いと考えることはできよう。

以上のような結果から、記紀が編纂される過程で、百濟復興のために深入りしすぎた齊明・天智両天皇への批判と、半島放棄政策を主張した磐井に対する再評価が行なわれた可能性が高い。過去の編纂内容を抹消することは出来ないが、磐井の系譜を天皇家に繋がるものとする事で、再評価の事実を明確にしたといえよう。このような系譜問題から、逆に磐井が半島政策に批判的であった姿が浮かび上がってくる。

継体天皇から欽明天皇にかけての磐井討伐を含む倭王家の混乱は、基本的に半島情勢がもたらしたものである。これは丁度、約一世紀半前の応神王家誕生時の混乱に似ている。半島情勢に倭国としてどのように関わって行くのか、そのことで国論が二分され、混乱が起きた点でそっくりである。四世紀末は百濟を守るためだったが、応神を支持する派兵派が反対派に勝った。六世紀では任那を守るための争いであったが、ここでも派兵派の欽明グループが勝利した。しかし、この勝利は高いものに付いた。結果的に白村江の戦につながるからである。

この継体王家の持っている半島に対する強い執着心は、記紀の記録から直接的に辿ることはできないが、継体天皇の持つ強い情念にその端を発しているといえよう。継体天皇自身が持つ初代倭王への畏敬の念と、出雲王家の偉業を護持しようとする意志とが結びついた情念である。この天皇の死後、欽明天皇の情熱と蘇我氏の大博打によって、その強い思いは継承された。そしてこの情念は継体王家の体質となり各天皇に、一つの遺伝子のように受け継がれてゆく。

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)

「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 編集後記

老舗「かんだやぶそば」が火事になったと聞いて驚きました。親父に連れられて良く通ったお店で、店構えとアプローチに歴史を感じながら、「せいろそば」をつるつると頂いたことを懐かしく覚えています。その蕎麦派のわたしとしては残念でしたが、伝統は建物ではなく引き継いでいる人にあるとの思いから、店の方々は無事と聞いてほっとしています。一日も早い再開を果たして、日本の食文化を守って頂きたいと願っています。(円行)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)、[メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp

